

俳句

たね だ さん とう か

種田山頭火

防府市
(1882～1940)



【著作】

- 『山頭火全句集』（平成16・春陽堂書店）
- 『山頭火全日記』（平成16・春陽堂書店）
- 『山頭火全書簡』（平成16・春陽堂書店）ほか

種田山頭火 年譜

（提供・富永鳩山）

明治15（一八八二）年

七歳

明治22（一八八九）年

一〇歳

明治25（一八九二）年

一四歳

明治29（一八九六）年

一七歳

明治32（一八九九）年

二〇歳

明治34（一九〇二）年

二二歳

明治35（一九〇三）年

二四歳

明治37（一九〇四）年

二七歳

明治39（一九〇六）年

二八歳

明治42（一九〇九）年

二九歳

明治43（一九一〇）年

三〇歳

明治44（一九一一）年

三一歳

大正2（一九一三）年

三四歳

大正5（一九一六）年

三七歳

大正7（一九一八）年

三八歳

大正8（一九一九）年

三九歳

大正9（一九二〇）年

四〇歳

大正10（一九二一）年

四一歳

大正11（一九二二）年

四二歳

大正12（一九二三）年

四三歳

大正13（一九二四）年

四四歳

大正14（一九二五）年

四五歳

昭和2（一九二七）年

四六歳

昭和5（一九三〇）年

四九歳

昭和6（一九三一）年

五〇歳

昭和7（一九三二）年

五一歳

昭和8（一九三三）年

五二歳

昭和9（一九三四）年

五三歳

昭和10（一九三五）年

五四歳

昭和11（一九三六）年

五五歳

昭和12（一九三七）年

五七歳

昭和13（一九三八）年

五七歳

昭和14（一九三九）年

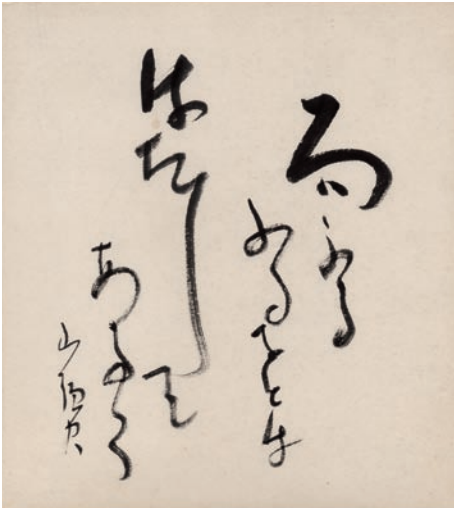
五七歳

昭和15（一九四〇）年

五七歳



うまれた家はあとかたもないほうたる
山頭火生家跡文学碑（防府市）



直筆色紙（西村屋旅館蔵）

雨ふるふるとははだしであるく

本名 種田正一、明治十五年（一八八二）大地主の種田家（現・防府市八王子）、父竹次郎・母フサの長男として生まれる。十歳の折、母フサが自宅の井戸で投身自殺。このことが生涯、山頭火に人間存在の不条理を意識させることになる。祖母ツルに育てられ、明治三十四年（一九〇一）現・早稲田大学に入学、この頃、ヨーロッパの自然主義文学の洗礼を受ける。種田家の傾斜と精神的不安から退学、大道にて酒造業を営む。佐藤サキノと結婚して翌年長男健が生まれる。この時代に自由律俳誌『層雲』との出会いが自由律俳人「山頭火」の出発となった。この俳誌の旗手、萩原井泉水の姿勢に大きな影響を受ける。井泉水は芭蕉の研究に熱心で、ことに精神的・求道的な方向に範を求めており、山頭火も自己の指針としている。酒造業失敗で破産。俳友をたよって妻子と共に熊本へ転居。大正七年（一九一八）、弟二郎自殺。翌年上京して東京セメント試験場でアルバイト。祖母ツル死亡。大正九年（一九二〇）、妻サキノと戸籍上の離婚となる。大正十二年（一九二三）九月、関東大震災に遭い熊本に帰り、妻の経営する「雅楽多」に寄宿。大正十三年（一九二四）、酒に酔い電車を急停車させ、これを機縁に禅門に入る。大正十四年（一九二五）、四十四歳で出家得度した。これが、のちの禅的表現・生き方・思维に大きな影響を持つことになる。翌年、味取観音の堂守となるも山林独住に倦み、観音堂を去る。

大正十五年四月、解くすべくもない惑いを背負うて行乞流転の旅に出た。分け入つても分け入つても青い山

これから昭和十五年（一九四〇）に五十八歳で松山の「一草庵」でコロリ往生するまでが行乞であり、放浪であり、身心放下の旅であり、闇から自由への漂泊であり、自由律俳句創作の旅である。出家までの稀有の生涯と旅といふ境涯の中で、孤独を導き出し死を意識させ、望郷の念をいだかせた。一方、酒に溺れ、おのれの逸脱した性格にも悩まされといった振幅の大きな軌跡が山頭火独自の哲学を生み出し、特異な自由律俳句を確立した。この振幅の大きさ、とりわけ人間の弱さと独自の句境が多く共感者を得ることになった。それは、やさしい言葉で一貫しているが、おのれの一生と引き換えにした句境はしばしば暗示的であり、象徴的である。これも又、山頭火文学の奥の深さでもある。一万を越える自由律俳句を残し、膨大な日記を残した。山頭火は自由律の道を選ぶことで文学史上、独自の句境を切り開き、俳界に一つの風穴を開け、可能性を展開した。昭和の芭蕉と呼ばれる由縁でもあらう。

（文・富永鳩山）

山口県佐波郡西佐波令村第百三十六番屋敷（現・防府市八王子二丁目）にて12月3日に誕生。

父竹治郎・母フサの長男。本名正一。

佐波村立松崎尋常高等小学校に入学。

母フサ（32歳）自宅の井戸に投身自殺。

私立周陽学舎（現・防府高校）に入学。学友と回覧雑誌発行。

山口尋常中学（現・山口高校）第四年級に編入。

私立東京専門学校高等予科に入学（早稲田大学的前身）。

早稲田大学文学部文学科に入学。

早稲田大学を神経衰弱にて退学。病氣療養のため帰郷。

吉敷郡大道村の酒造場を買収。一家で移り住む。

佐波郡和田村佐藤光之輔の長女サキノと結婚。

長男健生まれる。

郷土文学誌『青年』に参加。弥生吟社・椋鳥句会に参加。定型俳句の俳号「田螺公」。椋鳥会五句集（回覧雑誌）。

自由律俳句誌『層雲』に投稿。個人雑誌『郷土』創刊。椋鳥会『梅五句集』（2月号）でペンネーム「山頭火」を宣言。

3月、『層雲』の俳句選者となる。酒造業破産。同人を頼り熊本にて古書店・額縁屋「雅楽多」を開業。

弟二郎、岩国愛宕山で縊死。

單身上京。額縁行商。「東京市セメント試験場」アルバイト。祖母ツル死亡。

妻サキノと戸籍上の離婚。一ツ橋図書館臨時雇。

父竹治郎死亡。東京市役所事務員。

東京市役所事務員を退職。額縁行商。

関東大震災に遭遇。熊本に帰郷し仮寓。

泥酔して市電を止める。報恩寺に連行され、望月義庵を導師として禅門に入る。

曹洞宗報恩寺で出家得度。出家名「耕畝」。味取観音堂の堂守。

4月10日、一笠一鉢の托鉢の旅立ち。九州地方行乞流転の旅。防府にて改名届。

山陽、山陰、四国、九州地方の行乞。

熊本で『三八九居』の自炊生活を始める。

ガリ版刷個人誌『三八九』編集発行（1〜3集）自筆ノート「行乞記」を書き始める。再び自嘲の旅に出る。

山口県川棚温泉で結庵希望挫折。第1句集『鉢の子』刊行。小郡町矢足「其中庵」を結庵。『三八九』（四集）。

自筆ノート「其中日記」。

第2句集『草木塔』刊行。『三八九』（5〜6集）。井泉水を招いて其中庵句会を開く。福岡・玄海町隣船寺に生前唯一の句碑が建立される。

福岡、広島、神戸、京都、名古屋への旅。

第3句集『山行水行』刊行。死場所を求めて東上の旅に出る。

第4句集『雑草風景』刊行。自筆ノート「旅日記」。近畿、関東、甲州、信濃、北陸への旅。永平寺参籠。

九州地方行乞。第5句集『柿の葉』刊行。自筆ノート「其中日記」。

山口市湯田温泉「風来居」結庵。中原中也の弟呉一郎と交わる。

第6句集『孤寒』刊行。近畿、東海、木曾への旅。自筆ノート「旅日記」。

「其中日記」。

「一草庵」結庵。

第7句集『鴉』刊行。一代句集『草木塔』刊行。自筆ノート「松山日記」。

中国、四国、九州への旅。

10月11日未明、松山市「二草庵」で死亡。一万余の自由律俳句と日記を残す。

自筆ノート「行乞記」表紙と一頁

